

宅所え取り懸げ、村中放火せしめ、切寄に詰め寄り候といえども、堅固の格護をもつて、敵あまた仕付け、分捕り高名す。…野仲がこと、心元なきのよう申し散じ候や」（『佐田文書』、原文は漢文と、豊前東部の混乱は続いた。豊後の大軍による鞍懸城攻撃が半年以上も続き、豊前への出陣が不可能である隙をついての動きであった。

同十月、安岐城・鞍懸城が相次いで陥落し、田原親貫は逃れて、豊前善光寺辺に隠れていたが、後に時枝氏に滅ぼされたという。

その数日前の十月三日、大友勢は中豊前へ一てだてを打ち、「敵領数多打ち崩した」（『問注所文書』）と、宗麟が問注所統景へ報じている。

五 宇佐宮・彦山回祿

彦山焼失 天正九年（一五八一）には、兵火によって、開闢かいびやく以来初めて、宇佐宮と彦山が焼亡した。大友

「国家」崩壊寸前の悪あがきでもあった。

彦山は、天正七年正月、座主舜有が秋月方に降り、政所坊連長と伊良原因幡守を人質として差し出し、秋月種実の三男竹千代を養子とする約束を交わした。

天正九年十月八日、日田・玖珠郡衆が彦山を包囲し、別府口・落合口・玉屋口から攻め登り、大講堂に陣をとり、下宮座主舜有を西谷の上かみ来山くへ追い上げ、十一月三日、一山ことごとく回祿（焼失）した（第8回

参照)。

宇佐宮焼失

この二日前、宇佐宮が田原親家を大将とし、田原紹忍・吉弘統運むねゆきの率いる国東郡衆や、安心院麟生りんしょう・佐田綱・橋津英度はしづひでのりらの宇佐郡院内衆七〇〇〇余人に包囲され、ことごとく焼亡した(『益永文書』一三六号)。

この事件は、宇佐宮や彦山が秋月氏や毛利氏と結び、大友氏の支配に抵抗したために起こったことであった。これらの古代宗教勢力が焼き打ちに遭うことは、源平の争乱のときにもなかったことである。大友宗麟が、キリスト教信仰への傾斜を強めていたことが、宇佐宮や彦山の反発を招いたということはあったかもしれないが、大友氏側が、これら古代宗教勢力を否定し、これを意図的に破壊したとは考えがたい。

六 高橋元種の豊前制庄

豊前衆の離反と

大友方の反撃

天正十年(一五八二)に入ると、下毛郡の強固な大友方であった賀来統直・福島佐渡守・蠣瀬新介・成恒鎮直らがみな野仲鎮兼や高橋元種の支配下に入り、宇佐郡でも、田原紹忍・親盛父子の拠る妙見岳城に近い四日市・元重辺を除いて、秋月方となってしまい、田原紹忍は籠城す



第8図 彦山奉幣殿